慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	英国では、近代はワイルドから始まる?!
Sub Title	Is Wilde the first modernist?
Author	河内, 恵子(Kawachi, Keiko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2018
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.114, (2018. 6) ,p.109 (120)- 116 (113)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2017年度藝文学会シンポジウム「物語の近代」 開催日: 2017年12月8日 場所: 慶應義塾大学三田キャンパス北館ホール
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01140001-0109

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

英国では、近代はワイルドから始まる?!

河内　恵子

「物語の近代」というテーマを最初に巽先生から伺った時、私の専門のひとつがオスカー・ワイルドということもあり、これは吉田健一の『英国の近代文学』（1959 年）を扱わなければならないと思い、そこから始めることにいたしました。本日は『英国の近代文学』を足がかりとして、「近代」とは何か、というところから考えてみたいと思います。吉田の言う近代とは、彼が扱う諸作家から考えると、すなわちイギリス文学のモダニズムのことでしょう。

まずは、吉田が展開するモダニズム論を考察してから、最近のモダニズム研究がどのようなものか、代表的な批評を挙げてご紹介します。一つはピーター・ゲイの『モダニズム』（2007 年）、もう一つはミア・カーターとアラン・ウォレン・フリードマン共編の『モダニズムと文学』（2013 年）です。この二つは現在展開されているモダニズム研究において、非常によく読まれるテクストです。これらを使って、吉田のモダニズム論と 21 世紀におけるそれとが、どのような点で同じで、どのような点で異なるのかを考えてみます。また、本日は田坂先生、堀先生もいらっしゃいますので、ワイルドが日本やその文化をどう捉えていたかを、手紙や随筆を手掛かりに検討できれば、と思っています。

吉田健一の『英国の近代文学』の初版は 1959 年に垂水書房から発表され、1964 年に改訂版、さらに 1998 年、2013 年には岩波書店からも出版されています。今回、2013 年の新版を改めて読み直してみました。この著書は「英国では、近代はワイルドから始る」というワイルド研究者にとっても、そうでない読者にとっても、衝撃的な一文で始まります。吉田は近代の特徴を、「混乱」と「精妙な知識に裏付けられた無限の豊富」さにあると捉えています。どういうことでし

ょうか。吉田はエドガー・アラン・ポーにその始まりを見出します。

> ポオはヨオロッパの文学史の上では最初に言葉に文学の根本を見て、言葉というものの性質について研究し、実験することに彼の天才を費やした。（中略）言葉を手段であるだけではなくて目的と考える、つまり、芸術の本質を表現に置く近代文学の世界を確立したのである。（中略）英国では、ワイルドの前に近代文学の作品を書いたものは一人もいない。（中略）ペイタアの批評に分析が繊細な点で近代的に感じられるものがあるが、ペイタアはまだ多分にもとの秩序の世界に残っていて、時代が無秩序に向おうとしている時に、もとの秩序は拘束でしかない。（13–14）

この場合の「もとの秩序」とは具体的には 19 世紀ヴィクトリア朝時代、あるいはその時代の文学、つまりリアリズム中心の文学を指しています。そして、芸術作品の創造におけるインスピレーション、霊感のようなものが退けられて、「言葉の工夫」が方法論としてそれに取って代わると、述べています。文学の仕事をするのは批評家であって、批評は創造的な芸術だということ、これをワイルドの「芸術家としての批評家」（1890 年、1891 年）を例に挙げて吉田は持論を展開していきます。

吉田にとって、近代とは全体の秩序がどんどん崩れ去っていく時代、つまり、人間活動のあらゆる領域がそれぞれに秩序を追い求めて、総合化ではなく、分散し細分化されていく時代です。こうして無数の世界が出来上がっていくなかで、それら無数の部分をまとめ上げ体系づける秩序が欠如している、これが近代なのだと吉田は言います。全てを見通す一つの体系だけが欠如した豊富と混乱の時代が近代なのです。そして文学においても、言葉による表現が全て、つまり、方法も目的も言葉そのものだという、ある意味できわめて排他的な運動が出現します。そこでワイルドの登場です。吉田は批評家としての彼に近代性を見出します。全体性の破壊と部分の可視化という動きを体現するのがワイルドなのです。この場合の部分とは言葉の世界です。言葉が目的であり、手段でもあるという考えを表明するのが、オスカー・ワイルドであり、この考えかたに基盤をおいた批評こそがイギリス近代文学の嚆矢なのだと吉田は論じているのです。ある作品について何かを語ろうとするならば、自分の言葉であらためて、より精妙なかたち

でその作品世界を語り直さなければならない、ある作品をきっかけにして新しく自分自身の世界を創り出す、これがワイルドの批評、すなわち、創造的批評と呼ばれるものですが、そこから近代が始まるのです。近代はそれぞれの部分がそれぞれの到達点を見つめています。言葉なら言葉に始まり、言葉に終わるということです。

> ものを書く人間は、先ずは読むことから始めなければならない。（中略）文学と言うのは、過去が我々に残した作品の凡てを含むものなので、これに親しんでそれに対する態度を決定するためにも、近代以後に文学の仕事をするものは批評家であることを強いられる。（20–21）

批評家は読者であり、ある作品に対して、自分自身の別の言葉で、別の角度から批評を行うことでそこにまた新たな文学作品が生み出されるということです。

> 文学の仕事は認識するということであり、認識することが存在することにならざるを得ない。（29）

> 表現が認識のためであり、認識が存在の形式であることに掛けて、ヨオロッパの近代文学は東洋に接続している。そしてこの考えを追って行けば、ワイルドが言う通り、文学の目的は（あるいは、文学の目的も）、「なす」ことであるよりは「ある」こと、そして「ある」ことよりは「なる」ことにある他なくなる。（32）

> 文学を追求して行けば、言葉に突き当たり、その言葉が一つの抜け道を教えることもある。そして対象が言葉ではなくて人間の場合は、その通りには行かなくて、近代は確かに人間の解体に向った時代だった。（42）

言葉は言葉の世界で成立していくが、人間全体はどうなるのだろうか。吉田は近代は全体性の崩壊と部分の確立の時代であるが、現代文学を迎えるためには分散化していったものを再び統合する必要性があると述べています。時代的にまとめると、ヨーロッパの近代は 19 世紀後半のフランスに始まり、イギリスではやはり

19 世紀後半にワイルドに始まり、第一次世界大戦後の 1920 年代でピークに達するということです。従来の多くのモダニズム研究ではモダニズムは 20 世紀初頭に始まり、1920 年代にハイモダニズムとしてその頂点を迎え、第二次世界大戦終結とともに終わりを迎えるという見方がされています。すなわち、吉田のモダニズム論はその始まりを 19 世紀末に前倒ししたということになります。

近代は過敏と衰弱の時代だったかもしれませんが、文学自体は一つのジャンルとして確立されました。『英国の近代文学』の目次に目を通すとわかりますが、ワイルドで始まり、彼に多くのページが割かれ、最後の 3 章は D. H. ロレンス、ジェイムズ・ジョイス、イーヴリン・ウォーに当てられています。吉田はこれら後半部分で近代文学が終わりを迎え現代文学へと向かう準備が、すなわち統合されていく時代への動きがみられると論じています。これらの作家はまさしくモダニズムからポストモダニズムへと至る作家たちです。

吉田は『英国の近代文学』執筆にあたって新たに読んだ作品を列挙しています。T. S. エリオットを始め、ウィリアム・エンプソン、G. S. フレイザー、クリストファー・フライ、ジョイス、ロレンスと続きます。これらはすべてモダニズムにつながる作家だと言えます。吉田の言う近代とは、イギリスにおけるモダニズムだと私が捉えた理由はここにあります。最終的に近代文学から新しく現代文学へと向かうときに、何が必要かと言いますと、吉田は「肉声の言葉」が重要だと書いています。

> 我々は現代という人間再建の時代に向いつつあるのだと考えなければならない。それは、肉声で言葉を発する人間の時代である。（中略）ワイルドは人間の肉声を忘れもしなければ、また、忘れようともしなかった人間であって、彼がその最も重要な批評を対話体で書いたことも注目に値する。（中略）

何れにしても、この現代文学を準備する性格は、ワイルドで始った英国の近代文学に見られる一つの特徴になっている。(43–44)

近代文学とは、つまり現代文学の準備過程でもあったし、その最たる人がワイルドでした。人間に戻るということが、すなわち、人間の肉声をもう一度文学の中心に据えるということが肝要でした。吉田の文学論において、ワイルドは近代文学の最初に位置する人ですが、同時に彼は近代文学の最後にもその存在を強く伝えているのです。ワイルドの考えは近代の始まりであるとともに現代文学の誕生へと、吉田の言葉を借りるならば、「人間再建」へとつながっていくのです。このような点を踏まえて、20 世紀に書かれた吉田のモダニズム文学論から、21 世紀の新しいモダニズム論がどのような展開を見せているのかを先に紹介した二つの批評を取り上げて考えていきます。

現代を代表する歴史家ピーター・ゲイの『モダニズム』は、モダニズムを一つのジャンルに限定していてはもはやこのイズムを捉えきれないと主張します。彼は文学、絵画、彫刻、音楽、ダンス、建築、デザイン、演劇、映画といったさまざまなジャンルに表出するモダニズムに眼を向けます。またジャンルだけではなく、さまざまな地域で同時代的に起こっていた事象を確認したいと言います。しかし彼は自らは歴史家であるが、どの年にどういう出来事が起こったかという時代考証に基づいた理解のもとでモダニズムを捉えることが可能だとは思っていない、むしろその時代の感情、態度をそれぞれの作品や作家を分析することによって見出したいと考えています。彼は自身の見解を次のように述べています。

あらゆるモダニストたちが明らかに共通して持っているものは、今まで試みられたことがないものは、すでに試みられたものよりも優れているという信念、珍しいもののほうが一般的なものよりも優れているという信念、実験的なもののほうがありふれたものより優れているという信念である。(2)

これらがモダニストたちの共通意識なのです。そして、たとえ小さな差違があったとしても、全てのジャンルのモダニストたちは二つの明確な性質を持っているというのです。一つは、彼らが伝統的な感覚に相対したとき、彼らを異端へと向

かわせるものに誘惑されがちだということ、そしてもう一つは彼らに内省する姿勢があったということです。ここで、ピーター・ゲイもまたワイルドに注目します。ワイルドはモダニズムにおいて何らかの一派を創設したわけでもありませんし、大きな働きかけをしたというわけでもありません。ゲイは、その重要性を作品にではなく、作家の生きかたに、時代に潰された天才の姿にモダニズム性を見出しています。ワイルドの独自性は二方向に向かっています。つまり、自身の先達だけではなく後進をも超えていくということです。ワイルドの先に行く人もいなければワイルドの後に続く人もいなかったということです。彼の仕事は、例えば演劇では、伝統的な歴史劇を執筆していながらも、自らを伝統から解放して最終的には『真面目が肝心』といった全く新しいジャンルの傑作を創り出したのです。

ワイルドをモダニストたらしめるのは彼の生き方にありました。ジェイムズ・ジョイスが言うように、ワイルドは「流れるようなパラドックス」そのものであり、あらゆる事象に対してパラドックスで応えるような人物でした。

19 世紀末に劇作家 W. S. ギルバートと作曲家アーサー・サリヴァンのコンビによる『ペイシェンス』というサヴォイ・オペラがイギリスで流行していました。これは当時台頭してきた唯美主義者を揶揄する内容でしたが、この作品のアメリカ公演前、唯美主義の宣伝者としてワイルドが渡米したことや、当時の風刺漫画家たちにその姿や言動が題材にされ、ワイルドの人物像が唯美主義を体現するダンディというかたちで広まったことや、加えて、1885 年に発布された同性愛を禁止する法律に違反したとして、同性愛の相手であるアルフレッド・ダグラスの父親クィーンズベリー侯爵と裁判沙汰になり敗訴したことなどを、ピーター・ゲイはワイルドの人生における重要な出来事としてあげています。当時ワイルドのような上流階級の同性愛者の男性たちには、仮に起訴されたとしても裁判開始までに国外逃亡を図るチャンスが多くありました。しかし、ワイルドは何故か逃げなかった。

1895 年に投獄されたワイルドはこれ以降創作力を失っていきます。このようなワイルドの生きかたを見つめながら、ゲイは「モダニズムが民主的な運動ではなかったこと」を指摘しています。(66) ジャーナリズムは、文学や美術におけるスタイルの横溢と主題に向き合う実験的方法は、すなわち、モダニズムは、ワイルドの放蕩に端を発すると主張したのです。ある時代においてひとつの現象の

ように出現した人物に注目するピーター・ゲイのモダニズム論は独特なものです。彼は、パラドックス、同性愛、裁判、ジャーナリズム等、ワイルドが身に纏ってしまった悲劇、あるいは喜劇の中にモダニズムを捉えようとします。ですが、やはりワイルドは言葉の人でした。裁判でも滔々と自らの思想を語ったように、あらゆる場所で、あらゆる時に、彼が言葉に執着したことは間違いありません。ただ、その生きかたゆえに時代を敵に回してしまったのがワイルドでした。

ミア・カーターとアラン・ウォレン・フリードマンの『モダニズムと文学』は、ゲイとは異なり、モダニズムを文学ジャンルだけに限定して扱ってはいますが、ヨーロッパに限らず、アメリカなどさまざまな地域の文学を取り上げます。対象とする時代も 1870 年代から 1941 年の第二次世界大戦勃発後までと、幅広いスパンでモダニズムを扱います。モダニズム初期の代表者としてワイルドを取り上げ、彼がリアリズムを否定したところに新しさがあったとしています。対話体で書かれた評論『虚言の衰退』（1889 年）に着目し、言葉によって新しい時代を創ろうと試みたワイルドを評価しています。芸術至上主義は、19 世紀ヴィクトリア朝期のモラリズムや功利主義を否定し、人生と自然に回帰して、それらを描くことは芸術において「下品で、陳腐で関心をそそられるようなことではない」とリアリズムを拒みます。この拒否する姿勢からワイルド文学は始まったのです。この評論は読み物としてもなかなかに面白く、とりわけ、吉田健一が言っていたことと重なる部分には説得力があります。つまり、この時代そのものが細分化されていたという観点です。細分化された時代は、細分化された、キュビズム的芸術作品を創ります。いや、新たに何かを創り出すというよりも、すでに、壊れて、バラバラになった状態で存在しているものから、作品を現出させるのです。文学においてもキュビズムが、多様な作品の創造を促したのです。ジョイスの『ダブリナーズ』やシャーウッド・アンダーソンの『ワインズバーグ・オハイオ』、あるいはウィリアム・フォークナーの『行け、モーセ』やヘミングウェイのいくつかの作品が例としてあげられています。

オスカー・ワイルドは細分化を回避しえた類い稀なモダニストであったのかもしれません。彼は人間の声に統合する力があることを知っていたからです。吉田健一は、まさしくこの部分をしっかりと把握していました。

吉田健一の『英国の近代文学』で展開される批評と 21 世紀の最先端のモダニズム批評とは、重なるところがあります。オスカー・ワイルドを扱いながら、近

代の文学を、すなわちモダニズム文学を、分析しようとするその姿勢がまさにそうです。しかし、多様なジャンルを扱うピーター・ゲイのテクストは、その多様性ゆえに希薄な芸術史・文学史になってしまっている部分があります。また、ミア・カーターとアラン・フリードマンのテクストは、分断というモダニズムの特徴に執着するあまり、テクスト内で扱われるすべての作品が、細分化とキュビズムの視点から紹介され、個々の作品が内包しうる統合性が無視されています。新しい現代文学へ向かう、近代文学の、細分化されてはいても、統合の可能性を秘めた存在の明確さを伝える吉田のテクストは、今回紹介した 21 世紀の批評よりも魅力的です。